

社会課題解決へ 燃え上がる起業家魂

第21回キャンパスベンチャーグランプリ全国大会

講評

審査委員長

各務茂夫氏



夫氏

易かつ日常的に計測でき

上めず
しい。

事業化への道のりは長い、常に前進を

21回目となる全国大会を、CVGがスタートした大阪で初開催できた。CVG発祥の地で開催することができ感慨深い。CVGには、約四半世紀にわたって培ってきた「CVG VALUE」と言えるものがある。学生起業家としてのポテンシャルを可能な限り見出すこととする姿勢であり、

キマリと光る。磨かれざる原石を探し出すよう審査に努めている。今回も近い将来の事業化を期待させる提案ばかりだった。

経済産業大臣賞に輝いたのは、広島大学の片桐萌絵さんが提案した「民俗芸能の運営・参加システムのリデザイン」。地域に根づく祭りを再構築した。文部科学大臣賞には、名古屋大学大学院の角田健輔さんが提案した「

るとOD患者のくらしを改善する」と期待される。また、質疑応答を通じて、元OD患者でもある提案者らの強い思いを感じ、事業化へのパッションが伝わってきた。

今回、提案された計12の事業プランは、いずれも社会課題の解決に寄与する重要なテーマだった。事業プランを完成し

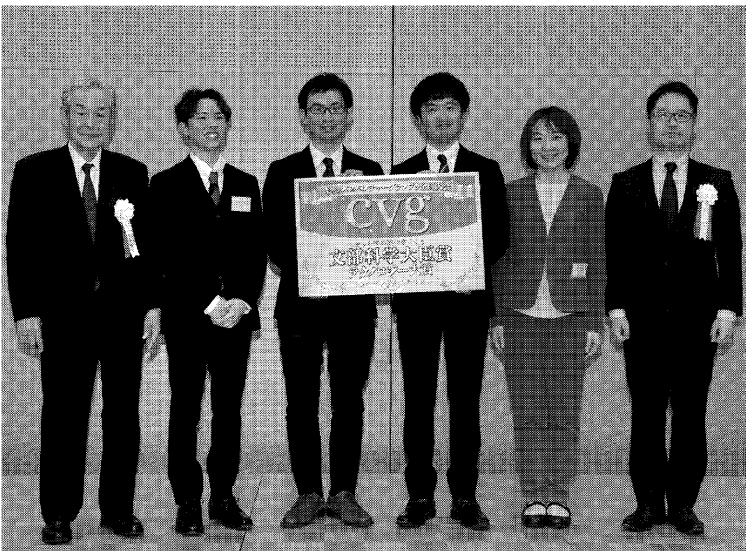
大学や高等専門学校などの学生がビジネスプランを競い合う「第21回キャンパスベンチャーグランプリ（CVG）全国大会」が、2月25日、大阪市内で開催された。全国8地区の大会で上位賞を受賞した計12チームから経済産業大臣

賞・ビジネス大賞に広島大学の片桐萌絵さんが、文部科学大臣賞・テクノロジー大賞に名古屋大学大学院の角田健輔さんらのチームが輝いた。社会課題の解決に向け多様なアプローチが提示され、学生の視野の広がりが伺えた。



文部科学大臣賞

テクノロジー大賞



角田健輔さん（右から3人目）とチーム「ぼじしょん」のみなさん、迫田健吉文部科学省 科学技術・学術政策局産業連携・地域振興課 産業連携推進室長（右）

名古屋大学大学院
角田 健輔さん

起立性調節障害の症状の測定装置の開発事業「起きられない」もどかしさを伝えたい

起立性調節障害(OD)患者向けに症状の重度を可視化できるツール「ODチェッカー」を提供する。

ODは立ちくらみや頭痛、失神などを併発する自律神経機能不全。中学生の約10%がODの症状に苦しんで

いるとされ、不登校の一因となっている。にもかかわらず認知度が低く、症状が目に見えてくいたため周囲から意図されているといった誤解をされることが多い。提案したODチエッカードでは、杖杖の心臓測定機器と独自開発したスマホアプリを用いて症状を診断し、その日の状態を可視化する。

喜びの声

自作がはじまり

文部科学大臣賞を受賞でき、関係者の皆様に御礼申し上げます。

今年度のスタート時点で5つの目標を掲げていました。その一つが全国大会での文部科学大臣賞の受賞です。

ODの認知度を上げる

とともに、症状をうまく伝えられないという悩みがあることを多くの人に伝えたいという思いがあったからです。今回の受賞によりOD患者の方から応援いただくことが増え、社会的な影響を感じています。

私自身がODに悩んでいたとき、世の中にODの症状を判定する装置がなく、自作したのが本事業の起点です。名古屋大学付属病院や専門医の方の協力のもと試作機の検証を進めてきました。OD患者の精神的な負担軽減に向け早期の実用化をめざします。そして、世界中の人々の生活が良くなるデバイスとして普及させていきます。

自作がはじまり

喜びの声

り、無理をせずに学校や仕事を休むことがで
きる。また、長期的な
記録をとることで回復
動作を把握することも
でき、患者の精神的負
担も軽減する。

OD患者は起立状態
が苦手とされる。測定
器を杖上にするので正
確な測定と転倒防止
を両立。杖には転倒防
る。また、試作機の応
用により更年期障害や
自律神経系の体調不良
を診断するツールとし
ての展開も視野入れ
る。

プレゼンするチームぼじしょんのメンバー

止セセンサーを内蔵する
こととして、より安全な装
置とした。

代表の角田さんらが
立ち上げたチーム「ぼ
じしょん」は元OD患
者を中心に構成され
る。名古屋大学大学院
工学研究科と医学研究
科博士課程、同大学情
報学部が連携した。名
古屋大学付属病院や専
門医の協力のもと、開
発済みの試作機で診断
結果の正確性を検証す

経済産業大臣賞

ビジネス大賞



片桐 萌絵さん(中央)、川上 悟史(経済産業省イノベーション・環境局大学連携推進室長)(右)、井水 治博(日刊工業新聞社社長)

片桐 萌絵さん

民俗芸能の運営・参加システムの
リデザイン

民族芸能（地域の祭り）を通じて地方創生につなげると同時に、外部の人が祭りの担い手として地域に深く関与できる仕組みづくりを提案。観光では得られない特別な体験を撮りつつ地域の祭りを次世代に残すことをめ

地域の祭りは地域住民を結び付け、地域の一休感をつくり上げる。ところが、わが国に約30万件あるとされる祭りの多くが、少子高齢化による後継者不足という課題を抱えており、90年代後半から2000年代にかけて26%の祭りが中断・廃絶したというデータもある。特別な体験を通じて外部の人が祭りのファンとなり、定期的な地域への来訪、さらには移住につながることは、手不足を解消する仕組みを考案した。

喜びの声

祭りをもっと
カルチャーに

民俗芸能の魅力をたくさんの人に知ってほしいという想いから参加を決意しました。いつも応援してください。方々に背中を押していただいたことも大きな一歩を踏み出すきっかけとなりました。

ビジネスモデルが確立されている民俗芸能という領域でマネタイズの仕組みを考えるのは非常に難しかったですが、それでも評価いただけたことに大変感謝しています。

今回の受賞はゴールではなく一つの通過点です。全国大会を通じて、時代のリーダーになりたいです。

ちと切傷、摩擦したこと、改めて事業化への決意を強くしました。民俗芸能を日本のポップカルチャーにするのが次の目標です。すべての人が自文化に誇りを持ちながら気軽に地域の一員となる。民俗芸能を通じて、すべての人が平等に人間らしく、輝ける世界を実現したいです。

.....

用した参加者の募集

和装でプレゼンする片桐さん

り、参加者は「体感や達成感を共有しながら地元住民などとの深い人間関係の構築につなげる。例えば、親子向けに農作業を経験したり海外観光客向けに日本の田舎暮らしを体験したりする要素を組み合わせることで地域の収入にもつなげる。

地域の祭りの完成度を高めつつ地域住民と参加者の満足度向上を

【主催】 日刊工業新聞社

【後援】 内閣府、経済産業省、文部科学省、日本経済団体連合会、日本商工会議所

【協賛】 東京証券取引所、日本MITベンチャーフォーラム、北おおさか信用金庫

<https://cvg.nikkan.co.jp>



